

熊谷蓮生一代記

六

L289

7



慶應二年

宣士月永之

桂作源岩川村

箱谷仔六



慈光蓮堂一代記卷之六

目錄

南都大佛殿遠之幸

并二慈光寺家信上人ノ習事

蓮生古郷へ下向送馬之事

并二同族叔翁ノ孝佛奇瑞之事

蓮生武藏野ノ寺澤宿所ニ於テ忍事

并二頼徳翁心切状之事

蓮生古郷ニ老母小對面之事

并二蓮生濱西粟生所小園居之事

頼朝公の危所甚き蓮生が對面する事

并に慈谷横取名号する事

慈谷の老母大徳生くる事

慈谷蓮生一代記卷之六

南都大佛殿造立之事

并に慈谷出家上人の調する事

世尊無極の慈悲甚き發せざるは多分終は上人の事也
得ん人。一旦の妙術す。我あしを動かす。或や如來
大悲の攝出たふ。空々しくんや。おも建久六年二月十
一日。南都東大寺大佛殿所造營終て。所付表の付
右大將頼朝卿結縁して。やせむい。より所上洛ある
慈谷。小所直家。所供して。登る。幸ふ上人の。所居を
あとし。渴する。又蓮生入道。年來の。所急を。これ
又達如尼威蓮坊へ。對面し。其後又入る。白ひ。何と

別わか後ご下げ向むか
まうゆゑり

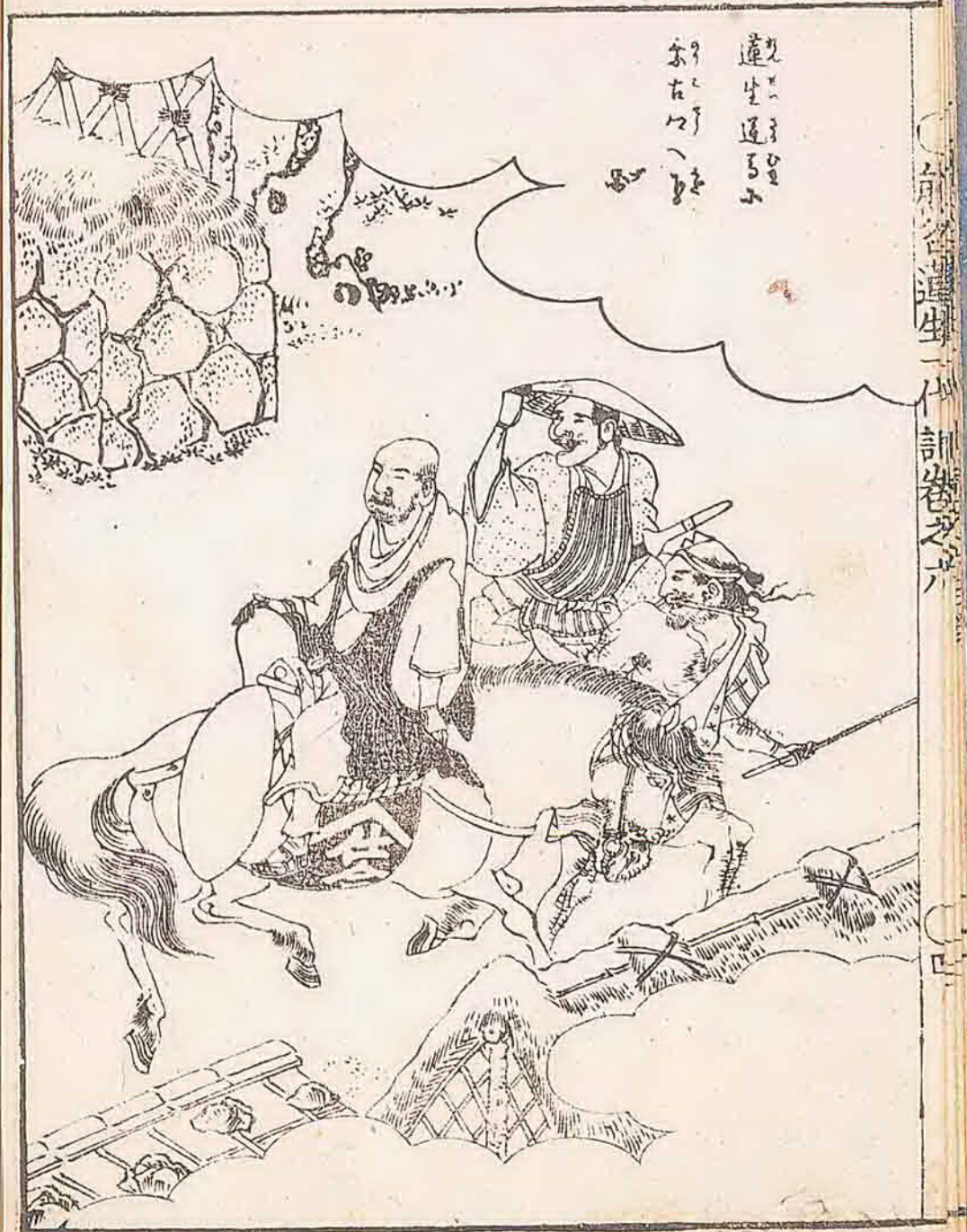
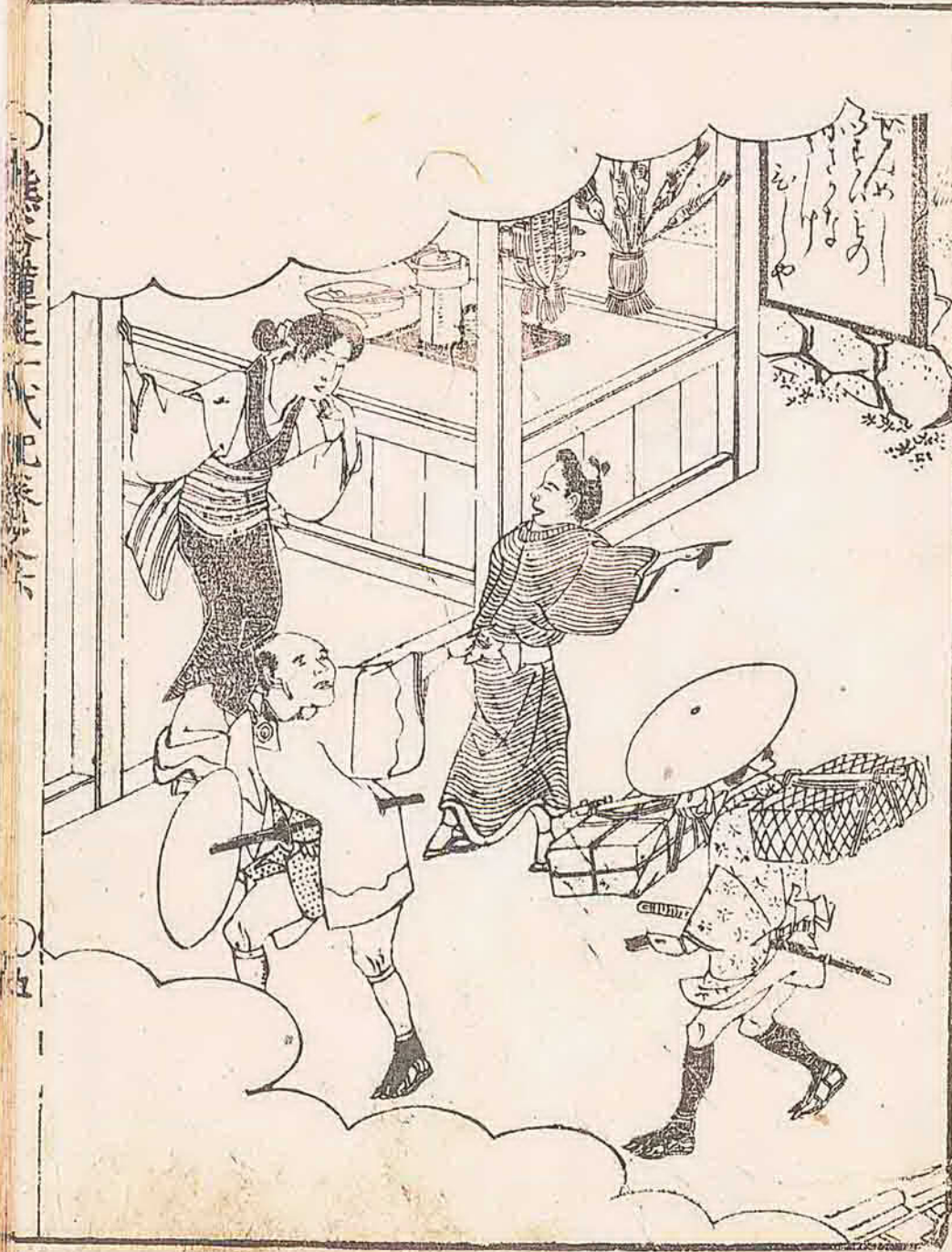
蓮生寺郷へ下向逢馬ノ寺

并同殿校尉之念佛奇瑞之事

おも蓮生法師ハ吉水の上人の住持なりとも云々をせあり
 わるバ。蓮生は狂き武士も所郷の方なり。これ折後老母
 の痛のじまへり。蓮生上人の四歳よりして中なるハ某を
 上人の所教訓を以て極楽往生の心は定むといふ。いふ。極楽
 國の老母は最痛のじまなり。若くは子もたうらん
 や。且後世の用心を考へんをけきた。定て覚悟ありといふ
 存ひ。バ。一まづ存心へ帰。念佛と勤りせん。蓮生は極楽へ生
 るに母と生えざるを云。恨なり。といふ。老母は覺悟あり。

も千人や千にバ千人は五萬といふも父母を孝養する人儀の通り。お母に念佛と勤人の廣々の教あり十方諸佛に奉るも。報恩の心ひきてハ佛を奉ずんゝ急ぐ下向す〜作られ運生居り所縁を著せりあるへ教ふる。頃ハ建久六年八月なり。幸來重生勇猛堅忍の念佛者ありても慈圓大師の要訣の行位在外不肖西方乃文を信て平生在外とも決て面と後とを。此より中へ一りうも西の方を想ふと膝と通はぬや馬も送るふ業て。居士にはおもゆるをる人女子無多れば重生一首これ辨よ。浄土も別のおもやるとすんあはゆいてうちもねん此類れら由とするぞ。徹也蓮生後そふきき性具し今なる

かくも思ふは。論語に剛毅木訥近仁とあるは、剛毅は剛毅とハ辨もなり強き人。木訥は木訥なりと云ふもの修めたる
 却てこれ振る人ハ信のまねた。又巧言令色鮮哉仁とて。
 言ふは教と飾。面もを飾ハ。性腐る不實の人情くかまき
 生二界を去るの身をも金銀の準備せん。性んと云ふ所ハ
 甚くは近き性もなれど。女もも豊饒貯蔵くは家
 の旅を渡りありも下向せんとおまじ。道中をつくぐ
 も久ぶりとあるは老母又一族の事へ面留せん。獅の
 と烟へりんと云ふ。其價を何ぞも借んと云ふの中。あも
 事ハ俗家ハ借なり。我々も心おしくあひいへも。あひ付
 たるものなり。旅をせり。あひいへも。あひ付



蓮生通るふ
余は竹へ

蓮生通るふ
訓巻之六

釋小海。名の真と振と。我信性ハ武蔵。或居士。然。若。以。即。
直實。と。ふ。者。今。あ。家。して。蓮生。と。ぞ。い。ぬ。ふ。け。さ。い。古。
郷。へ。親。う。ん。す。た。路。用。む。さ。で。り。ゆ。ま。ま。れ。芳。志。と。ん。ふ。信。
再。や。る。時。と。も。目。を。や。又。信。む。て。や。れ。ば。ま。あ。振。是。ハ。之。て。
あ。と。欺。き。か。う。ん。も。望。成。か。う。ん。と。推。考。して。ま。あ。又。ハ。お。ま。
ま。續。て。も。智。善。の。人。う。ご。ハ。用。之。難。し。と。け。は。ば。蓮生。と。れ。と。
爾。て。此。者。ハ。殊。小。邪。見。放。逸。の。族。く。わ。役。の。奴。と。も。押。み。て。
や。ける。ハ。我。殘。と。信。ふ。實。お。と。信。て。信。り。ま。ま。ま。曲。て。信。む。て。取。
く。ふ。事。ま。ま。受。お。ハ。何。か。る。ぞ。わ。一。ん。で。後。貸。べ。と。ま。蓮生。
され。ば。ま。は。師。の。お。か。ま。ま。お。ハ。利。を。せ。お。も。か。依。て。我。今。終。ん。
佛。十。遍。と。唱。て。それ。と。實。お。う。て。ま。や。又。の。後。と。信。べ。と。や。れ。ば。

有。ま。ま。ま。お。う。う。い。い。と。始。う。ん。の。め。坊。ま。ま。ま。と。ま。い。一。果。
て。私。ん。と。ま。ま。と。振。十。遍。ハ。お。う。ふ。不。遍。唱。う。も。一。後。の。終。り。
う。う。う。ぬ。る。え。殊。又。信。と。う。お。ハ。ま。ま。と。止。る。と。か。か。其。え。の。唱。
う。う。ま。仏。ハ。ま。あ。や。と。あ。ご。笑。う。ふ。蓮生。い。う。も。我。ま。仏。も。信。は。
形。あり。我。一。遍。の。ま。佛。と。唱。う。付。ハ。一。蓮。と。ま。十。遍。う。十。蓮。は。蓮。
華。と。ま。ま。此。故。ハ。信。お。と。ま。ま。ま。と。う。と。や。あ。ま。ま。信。と。ん。あ。
ら。ば。ま。信。お。と。ま。と。信。と。信。て。ま。の。り。信。ハ。ま。佛。と。唱。う。は。ま。
蓮生。坊。ら。た。り。ま。極。ま。ま。ま。ま。金。ま。ま。一。と。信。を。信。佛。
う。唱。う。ふ。石。思。信。ち。り。小。庭。前。ハ。あ。ら。ま。蓮。華。忽。然。と。ま。
ト。ま。ま。ま。も。信。の。ち。ら。ま。ま。も。信。と。あ。ら。して。因。縁。も。せ。ど。
信。を。信。う。ふ。蓮生。は。師。ハ。終。ふ。十。遍。と。唱。終。ま。十。蓮。ハ。蓮。

夢あつて生きたる身は奇情を感ずるに事又はいそ
情をいふやうにも所入の才あつたといふと傳へ
改て弘法大師の再来とて感服して後身は後とて
信じてその用達やべいとせむ。道生房を中又とて
方りと。後信は不世にあらざる返海とていふ事
ある返海といふやうに去ちて往來のなまふまふ
とて好く授けおぼせ生かしくいひて慈恵として
後身は坊いふとて教へて起しけるがまはゆい後
及枝のあふまふ。信の後返ると事とお面泊して一
述てまゝ又の後とて返海とて渡れば事とて蓮花の
生る奇情を感ず。後信業を能く勤むの氣あり加

信のあつた。道生房が入るを信び。後信の返海
おぼしめ返海といふやうに去ちて往來のなまふ
信の世とて返海といふやうに去ちて往來のなまふ
是ハ一旦我未信するふたし返海せむか象のなまふ
さうく文あると云ふ事とて後方とて返海といふ
事とていふも後信の信とて。其代に教日とて返海
有難き法門といふ後信の信とて。金言とて返海
も其信の信とて。相傳の信といふ海とて。返海
信の信といふ返海といふ事とて。其代に教日とて
生れ返るといふ。其代に教日とて。其代に教日とて
返海といふ。其代に教日とて。其代に教日とて

おれに下され。改てけ方へ求む。意を以て價を高くしき。而
 我はあつてけけしに違ひいやとよさふあは。此をい
 修め十遍の意伝ふ。そととけ方へ違ふ。ししとよさ
 合意せう。んをいハ中條の唱あふえ。それと成せ
 へあふ。あふえとけけし。違ひ相く。そえハあふ。あふ人
 我。そを我を借用の時。修めりて十遍の意伝ふ。唱て
 無く。只と主我と海上。主元又十遍の意伝ふ。唱て我
 に違ふ。是理の南無とけけし。事主修む。修め主我を
 唱あへ。十遍の意伝ふ。代は我が唱り十遍とて。唱下と
 へ。何へ十遍なり。唱りんととと違ひいやく。修め無用
 へ。只に無く。修めが道人と云ふ。事主其時殊勝に

くも命をうけて。南無阿彌陀佛くと十遍唱へて蓮生
ちとあて傍縁と海に。僕れと我より我も落付りたりと
ほびし秋ハ履行に入て休る多事まハ竹の氣もつらど
おこす直一思の道なり。我より念佛して入念なり
くも。僕よ出家の親賢方一人と下笑ふい。お釈めにて
おちとりまばきのみをもさして舞くは礼なる蓮花
一葉もわがぞ悉く消えり。年また大勢の蓮生を境に
これ蓮花はやぶれば蓮生お笑を吾のふきはる世にあそ
て我おが唱せし蓮花の如き其優といひ悦べとれうせだ。
蓮華もくふ清なる理人。ちんを怪むふたずしくせば
感嘆しめてかく者なき鳥偶れた。凡化のみふふ

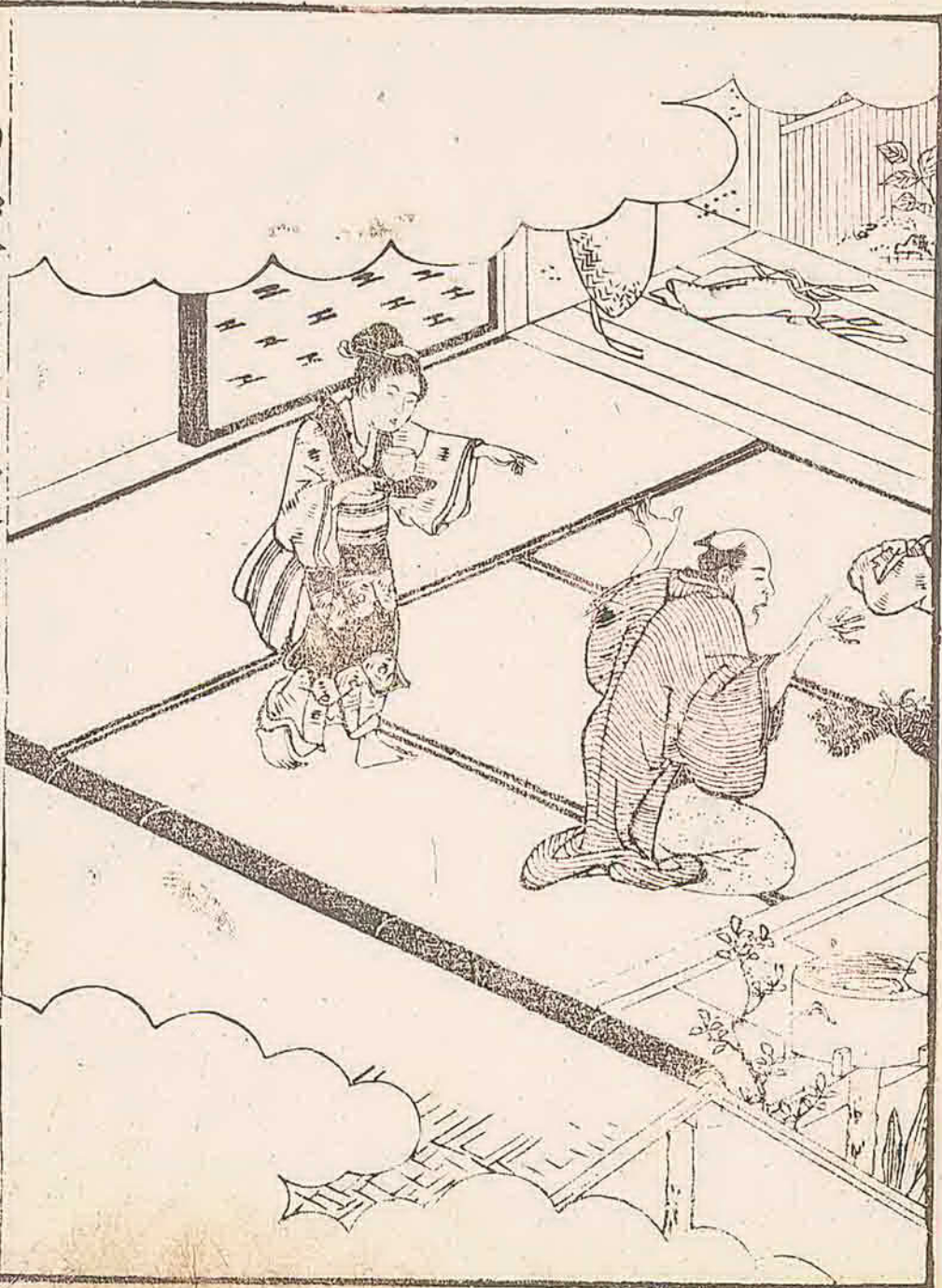
わへ。佛そ菩薩の彰向なり。さて。聖に身をあらわさ
て。慈愛をもとめり。預けり。一唱なり。も。多佛
ありて。ワ。象又蓮をまゆ。こ。平伏して。乳おすれ
た。蓮生の云。か。う。ど。慈愛せ。何。事。な。れ。穢土の
現世。不。善。を。死。生。せん。より。い。来。来。極。樂。淨。土。の。蓮。を。結
ぶ。る。事。な。り。信。心。を。彰。て。極。名。を。佛。す。る。人。を
か。う。い。ふ。蓮。生。お。ま。ま。も。こ。う。い。ふ。と。教
化。し。る。も。ど。事。も。一。旦。の。う。ぎ。ふ。感。歎。す。る。と。も
今。ま。ま。い。徹。乃。ん。も。な。り。一。が。世。教。化。な。ら。ば。は
世。の。憂。ち。う。事。を。悟。り。る。こ。を。見。ん。の。人。と。世。の
市。を。な。り。て。法。門。を。往。阿。一。作。ふ。お。ほ。き。佛。の。極

入。大。信。心。の。行。者。と。ち。り。あ。け。る。其。後。ほ。を。行。て
一向。家。乃。祖。師。親。鸞。聖。人。東。國。化。導。を。な。り。あ
お。う。か。の。名。の。亭。主。を。人。の。所。来。み。と。ち。り。を。授
て。幸。と。な。す。今。駿。州。並。頭。郡。辰。枝。の。名。蓮。生。寺
と。な。り。京。師。本。が。預。寺。候。なり

蓮生寺武蔵野を望津宮は三郎頼延の蓮生

并頼延發心行狀之事

蓮生は師。信。心。人。武。藏。野。今。東。海。道。の。所。と。通。る。に。い。ふ
う。の。家。の。名。郎。黨。海。々。堂。と。て。大。勢。の。性。を。具。興
た。大。名。の。女。公。を。ふ。む。し。れ。面。影。も。精。を。け。り。と。道
を。け。て。蓮。生。と。い。ふ。馬。上。常。と。い。ふ



おんきよき
さきよき
おんきよき
さきよき
おんきよき
さきよき

より人々を導きたる。新金をばなかりけ。其時、
頼遠方より。龍谷先生とやまて。そくゆしやう。
客殿無き。ちり果ていぞ。やけき。頼遠
ろき馬より。そめつ。く相見え。いふ。うね。
いふ。越さうけむ。り。某都の大番れい。い
た。ひま。せん。せん。や。お。い。い。い。い。い。
と。い。い。越方。お。り。終。て。ワ。い。い。い。い。い。
と。蓮生頼遠ふ。い。い。い。い。い。い。い。い。
い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
頼。と。念佛。と。い。い。い。い。い。い。い。い。
い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

た。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
勝。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
て。親友の言を。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
す。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
より。念佛。は。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
上。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
又。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
一。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

通ふもあましく。新勅撰集以後の和歌集にうづまき
蓮生の初予れ哉とハナリ

新の裁集めんのつかりとてある

うづまきの蓮生

月うけれ秋ハ初をふたりねも誰ううん毒れ後衣

續拾遺集二月十五日れ初とてある

日

けのふらゆむいちのきももれ。八十れ集連めり

其外海方あまのりもも累り。蓮生り年八十を餘集

西元元年十一月十二日端坐合掌してまゐり。後

程の夢れありて。蓮生のまゐりとてまゐり。うゝ

と龍寺の別院華堂を築あり

然る蓮生古郷に老母ハ對面とて

并同洛西粟生也小因病と事

叔も蓮生法師。三ヶ年うゝ少て帰せし事ある。家

内ハにねよと。一門知音の人とも集ひたり。たぐひ

と事とてある。それら置きて法師。老母ハ勿論妻子

旁屬田舎人々も小念佛をす。現尚二世の利益

ありとてあるに信仰れ志とてある。とてある。門

頗微せり。中も律を三郎為守とて。那所堂田の

人々も上洛の所と人々をたのむ。とてある。所

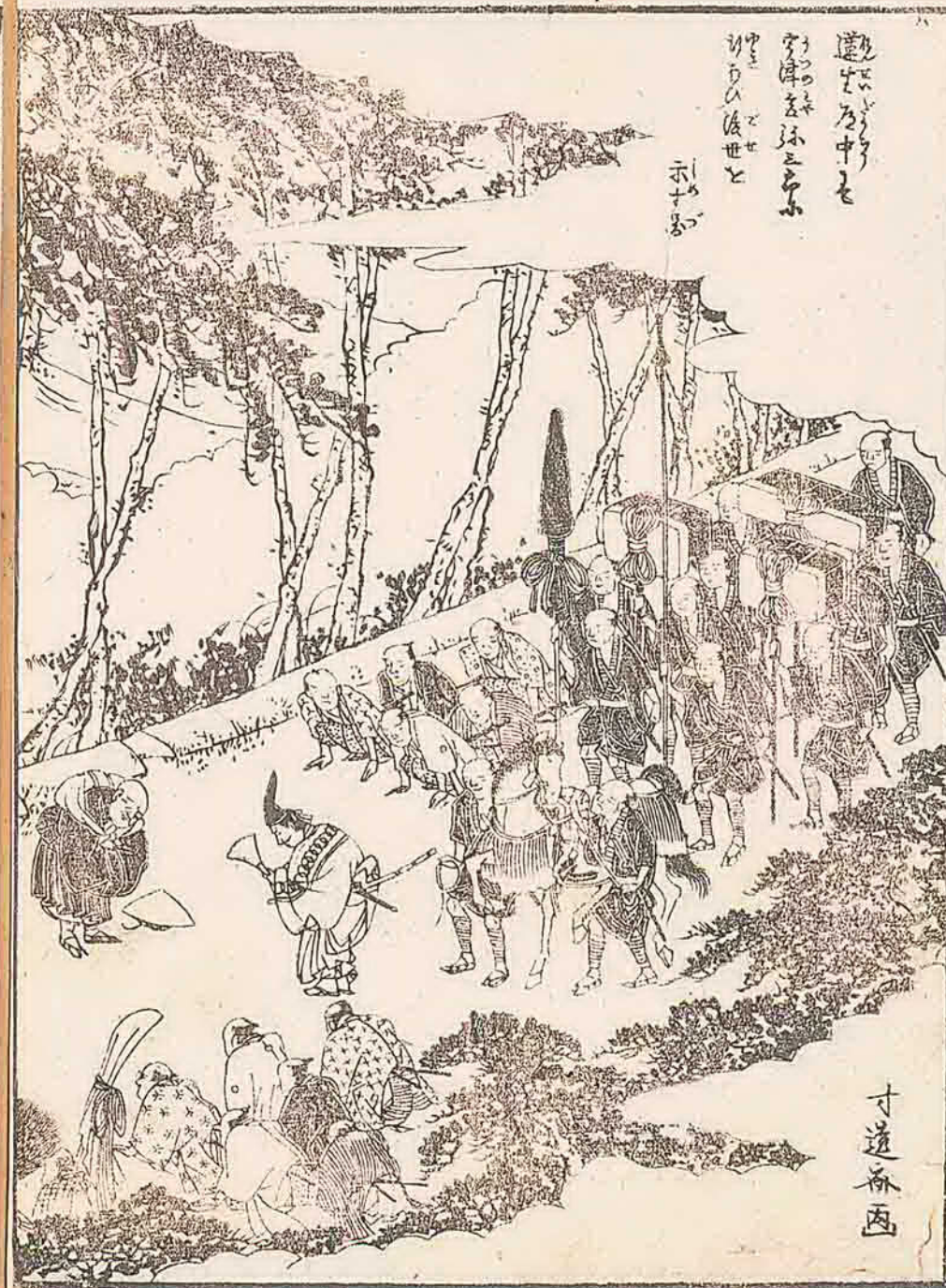
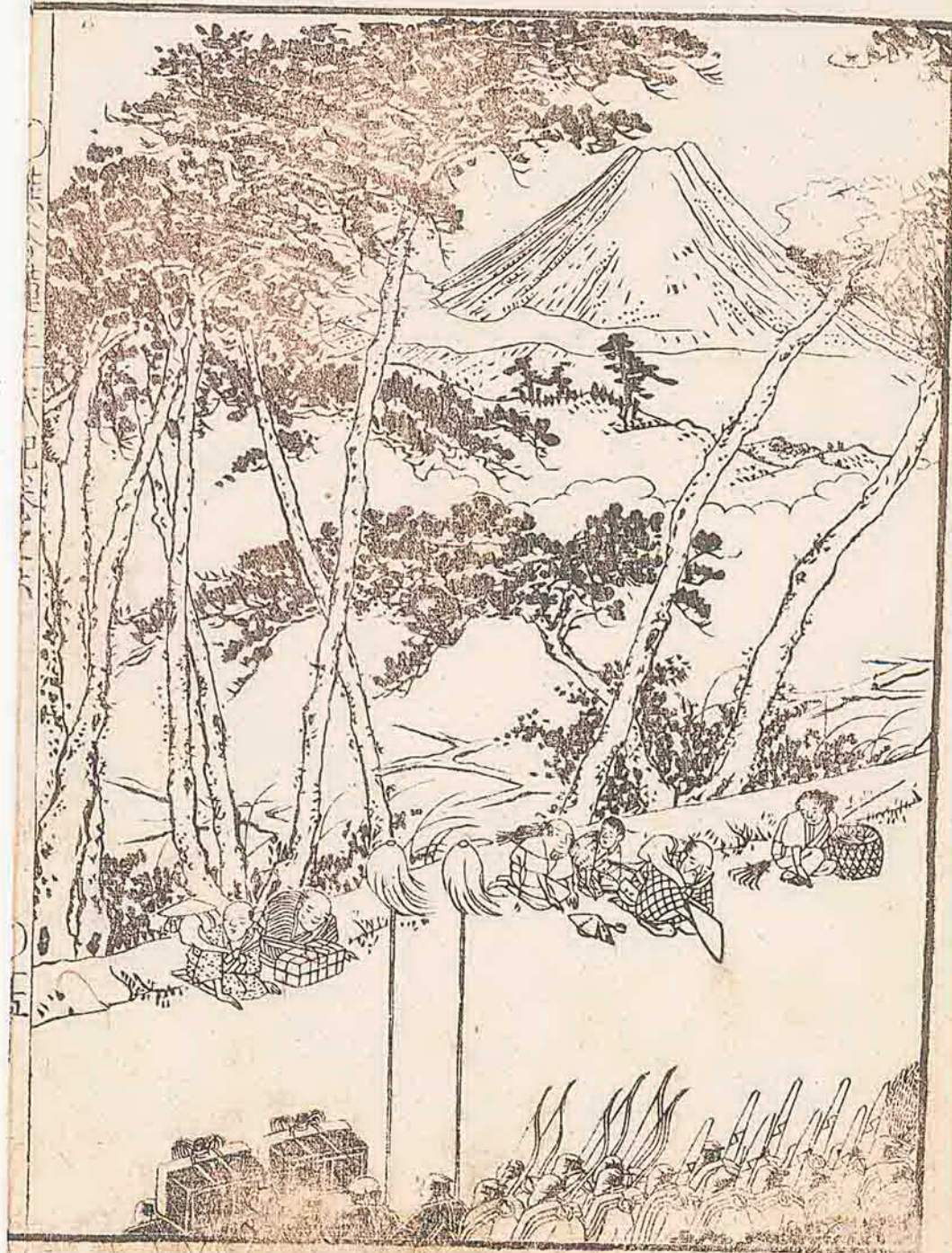
より。その解一向を授けし者三十餘人おれ。ふま

建久七年の基。蓮生入道とて上洛とてある。人々

練めてし。それが。幾心の後上人は。蓮生り。僅

三年ふ備いひて。あつた佛門にあつて御意例を蒙る
たれしゆれありしか。此のむきと都人のありやんと
あるやうとをいふ。御意もつらせむ。一日あるも
御例をききて。御意もつらせむ。一日あるも
一とあるも。御意もつらせむ。一日あるも
とあるも。御意もつらせむ。一日あるも
にまつと。御意もつらせむ。一日あるも
今てい上流と。上人の御意を蒙る。御意の
要とあり。御意もつらせむ。一日あるも
うとあるも。御意もつらせむ。一日あるも
御意もつらせむ。一日あるも

大おとといひて。我事ハ。御意もつらせむ。一日あるも
き者方と。御意もつらせむ。一日あるも
ハ母つと。御意もつらせむ。一日あるも
とあるも。御意もつらせむ。一日あるも
御意もつらせむ。一日あるも
命と。御意もつらせむ。一日あるも
浄土の志と。御意もつらせむ。一日あるも
斯世と。御意もつらせむ。一日あるも
とあるも。御意もつらせむ。一日あるも
とあるも。御意もつらせむ。一日あるも
とあるも。御意もつらせむ。一日あるも
とあるも。御意もつらせむ。一日あるも
とあるも。御意もつらせむ。一日あるも



遊生の中へ
 雲津を泳ぎ
 中へ
 後世と
 示す

我わづらひてくわすも嘆にたきんとすれとまん。まゝあつ付の定室を成
凌ぐそ紙子とあそそきくぬよ

いづへの儘よすそ紙夜ハ風の秋イ知も無うざりたり 終吉蓮生

頼朝公に尼御基蓮生不対面し事

并ニ終吉横れ名号の事及蓮生れ老母大に生れり

安房終りて八月終りに下ひして。粟生野に終吉をより
そのら蓮生をよむ古郷ふり。母も対面をうげ。又ハ
一族無縁の家も化量方さんと。上人よむととて御真
勢れを名号と稱ひくふ。上人御承知ハわりたり。其御を
終吉宗門をよりんと。南都北嶺のら度障化をうと
る中をきた。上人これをうとめむひくふ取たり。おとせ

いふに延におびくは。蓮生坊ハまいの氣障也。まゐ
いふにいつても御基蓮生の名号を持くとんとす
て。まより御弟子れ中へ下され。そのまの蓮生の名号
をうとめむひくふとて。おとせ。終吉をうとめむひくふ
を神宮へまゐりて。まより。國東へ下向を。去年正月
十三日右大将頼朝卿御遊去を不傷て。御廟系の花
めふ源金君より。御基所ハ尼公とたりて。おとせ。蓮
生は法師がまゐとそとせむひ御基は。おとせ。念佛乃
事と御たつ。おとせ。蓮生がそく。易の易修の妙法。そ
六字果号ふ。万善妙祥と備く。万徳所願。れ。宝号うれ
も。五逆十惡の罪人。か人たりも。改悔のころばと

念ふて念佛と相續せむ。極樂往生ハ佛の大悲より
 せし事迎へ接しあふを待つてと人より御妻を
 紫よりやまをちり。程々先君御善徳の御方あり
 念佛の御廻向をうけとちり。入るに難くも教を以て
 約ふ上人一七日別時念仏に勤行し。六回約ふ加はれて。亡
 魂得脱の現世をぬく。其の徳も沙汰信心を増し。を
 必く念佛して。其の後生を助ふ。蓮生ハ意味して。妻
 事ハおもしろ。あつるハ御父と上人。四つあ人も終るべき
 の事と。わくも念仏の教と。りと御善と。返さ。終て終る
 歸ふせり。建久七年。上洛して。正徳二年。御妻五年のり。な
 る。老母妻。子。れ。收。限。多。く。建久ハ。念。念。念。念。の。安。念。を。信。て。毎。日。

老母六万遍。入る。ハ。七。万。遍。の。念。念。念。念。を。修。行。二。念。念。の。印。契
 事。を。終。ふ。蓮。生。あ。つ。時。念。念。念。念。中。お。ま。あ。ひ。多。く。我。け。度。ぬ。必
 と。意。多。れ。他。の。名。を。と。探。事。し。と。大。方。な。罪。を。か。ん。と。い。づ。き
 良。付。は。教。の。上。人。の。所。作。へ。死。御。と。い。右。の。由。と。り。建。君。死。す。ぬ。ハ
 子。子。速。速。な。ま。づ。其。智。人。の。名。を。信。が。先。速。速。な。名。を。と。り。信
 下。さ。づ。く。と。り。を。く。れ。ハ。上。人。の。名。を。信。が。先。速。速。な。名。を。と。り。信
 返。さ。づ。く。と。り。を。く。れ。ハ。上。人。の。名。を。信。が。先。速。速。な。名。を。と。り。信
 事。り。一。名。を。信。が。先。速。速。な。名。を。と。り。信

熊谷清生。の。名。を。信。が。先。速。速。な。名。を。と。り。信
 揚。州。多。田。久。安。寺。を。あ。つ。て。久。安。寺。を。信。が。先。速。速。な。名。を。と。り。信
 せ。し。終。る。れ。書。状。ハ。今。京。都。淨。土。院。より

蓮生此老母大往生之事

元禄癸卯。正治二年も経建久元年と改元あり。老母ハ
年八十八歳なりて極老りとて伴々遍々入居ハ所も例を
去ずて共々志仏を勵む。又その人々其孝心を感ぜり。御
其年八月十五日子時お体落して佛あり。其
如くに志仏教を返す事も同様に勵む。老母ハ其
合掌して目如夜生と云うれ多。時ハ八十九歳之時を
蓮華の縁務房も信如居士と云ふ事あり。蓮華の老母
目如夜生の中を歩。夜中て旦向ありとあり

熊谷蓮生一代記卷之六終

